

氏名(本籍)	おち あい あき こ 落合明子(滋賀県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1684号		
学位授与年月日	平成13年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	歴史・人類学研究科		
学位論文題目	Working for Themselves : African American Agrarianism in Lowcountry South Carolina during the Reconstruction (再建期の黒人のアグレリアニズム—サウスカロライナ州ロウカントリー地域を中心に—)		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	明石紀雄
副査	筑波大学教授	博士(経済学)	中井英基
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	木村和男
副査	筑波大学助教授	文学博士	立川孝一
副査	筑波大学教授	博士(法学)	辻中豊

### 論文の内容の要旨

本論文は、アメリカ南北戦争後の再建期において黒人が土地獲得運動を目指しそれにより自立を達成せんとした運動を、サウスカロライナ州ロウカントリー地域を具体例として検討した作品である。

長期にわたって奴隷の身分にあった黒人は解放後、土地を所有することによって経済的自立が達成されるのみならず、政治的ならびに社会的自由を獲得できると考えたのであった。このような理念はアメリカ合衆国史を通じて一貫して見られたものであり、農耕に従事する独立自営農民こそが勤勉・質素などの美德を持つ理想的市民とされてきた。ロウカントリー地域の黒人による土地の獲得と自立を追求する運動もその延長として捉えることができる。本論文ではかかる黒人の願望とその実現のための運動をアグレリアニズム(自営農市民主義)と呼ぶ。

本論文は、序章と終章を含む全9章および参考資料から構成されている。序章において、問題の所在および研究目的を明らかにし、再建期研究の動向について概観する。1960年代まで再建期研究を支配したダニング学派は、解放後の黒人の土地願望は根拠のない夢であったと低く評価した。しかし、1960年代にリヴィジニズム(修正主義)が起こり、同学派を批判し、再建期の革新的な側面を強調した。1970年代には、このような革新的側面にも人種差別主義が潜んでいたと指摘するポスト・リヴィジニズムが起こる。1980年代以降は、かかる再建期の保守的な側面を認識しつつもその進歩性を認め、また黒人の視点に立った研究がなされている。本論文はこの最新の動向に沿うものである。

第1章「ブラック・マジョリティ(黒人多数派)の形成」は、労働力確保のために大量の奴隷が18世紀にアメリカから輸入された結果、サウスカロライナ州ロウカントリー地域では他の北米植民地では例を見ない程に黒人人口が集中し、彼らの労働に基づいた長繊維綿花の栽培と米栽培が導入されていった過程を考察する。

第2章「奴隷の自立性を促したロウカントリーの奴隷制の特徴」は、奴隷ドライバー(有能な黒人奴隷がプランテーション運営を監督する制度)、タスク制(割り当てられた仕事を自分のペースで行える労働形態)、スレイヴ・エコノミー(余剰物を蓄えた奴隷が発達させた非公式の市場)および大規模な奴隷コミュニティ(奴隷文化や奴隷のアンデシティティを育成)が広く展開し、ロウカントリー地域の奴隷は自らの労働と時間の使い方についてかなりの自由を享受していたことを指摘する。

第3章「ポートロイヤル・エクスペリメント」は、1861年11月の連邦軍による同地域占領以後入った、主に北部民間人による政策実行の過程を検討する。すなわち、解放された元奴隷を商業作物栽培に従事する賃金労働者に転化する「実験」がなされたのであった。その結果、彼らの期待とはうらはらに、黒人の自立志向は阻まれることになる。

第4章「税滞納地の売却と占有運動」は、1863年1月に「奴隷解放宣言」が發布された後、連邦政府により解放奴隷の将来の処遇に関連した政策が打ち出されていく過程を検討する。とくに1863年および64年に実施された直接税滞納地の売却と黒人たちによる先買運動の意義を探る。

第5章「『40エーカーとラバ1頭』を巡る攻防」は、黒人が土地を獲得し、自由市民としての動きが開始されたかに見えた時期を扱う。このような状況は一時的なものにすぎず、やがてアンドリュー・ジョンソン大統領の反動的な再建政策によってシャーマン将軍による特別野戦命令第15号が取り消されると、彼らの土地所有の権利は脅かされ、それを守るために時には武装による抵抗に訴えたのであった。

第6章「戦後政治と黒人」は、再建期における政治への関わりを、州レベルとローカルなレベルにおいて考察する。すなわち、彼らはローカルなレベルで政策決定のプロセスに直接参加すると共に、州レベルでは他のどの南部州よりも多い黒人州議会議員を輩出したのであった。これは彼らの政治的成熟を示すものである。

第7章「ヨーマン（独立自営）・コミュニティの達成では、戦後のセントヘレナ島を例に、黒人による土地獲得の達成度とその意義を考察する。同島では1870年代までに、黒人の過半数が小土地所有者となった。彼らは綿花栽培取り入れつつも、自給自足を主体とした独自の農業経営を志向し、それを実現させたのであった。

終章では、ロウカントリー地域の黒人による土地獲得運動は、奴隷制の下で培われた伝統的な側面—それは彼らを結束させ、個人主義的な競争原理の中に共生の思想を持ち込むことに寄与した—と、近代的な側面—市場経済の中で行動し、政治運営に参加する能力を有していたこと—の双方を包摂していたこと、いいかえれば、引き継いだ伝統を活用しながら状況に柔軟に対応しつつ、彼らは自由市民としての有りようを追求したと結ぶ。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、入手可能な原史料をあまねく渉猟し、奴隷解放後の黒人による土地獲得運動を詳しく検討したものである。黒人は単にアメリカ社会のマーギナル（周辺的）な存在としてではなく、伝統的な諸価値—とくに自立—を自ら実践せんとした人間像として描かれている。この時期の黒人をアグレリアニズムの担い手として見る解釈、すなわち他者によって規制されることのない、また他者の善意に依存することなく自らの体験と意思に基づいて自ら進む方向を選択できる状況にあったとする解釈は、彼等の歴史的役割をポジティブに評価するものであり、従来とは異なる視点である。

具体的には以下の点が示されている。第一に、黒人をして土地所有の権利を主張せしめたのは、集団として長年にわたり無償労働を強いられてきたという彼等の歴史認識であった。第二に、先買運動に積極的に加わったのは、黒人たちが土地の無償分配を求めてはいなかったからである。かくて、ロウカントリー地域の黒人に関する限り、19世紀中葉から後半にかけてアメリカ合衆国において広まっていた自助の思想を反映したものであった。第三に、彼らは、白人社会と一定の距離を保ち、自主的な人種分離の傾向をも示したのであり、その面でも彼らの自立志向の姿勢はうかがえる。第四に、黒人会議などの開催、嘆願書提出、土地委員会での活動などは彼らが政治的成熟を遂げつつあったことを示す。

かかる指摘はアメリカ南北戦争後の再建研究への新たなアプローチを提起するものとして高く評価できるものの、さらなる検討を要する若干の問題も残されている。第一に、南北戦争後のアメリカ合衆国南部の他の地域における同様の運動と比較することにより、ロウカントリー地域が例外的であったかあるいは普遍的な性格を有していたかが、より明らかにされよう。第二に、19世紀後半に黒人は国内の厳しい差別構造に組み込まれるのである

が、再建期における自立の成果—それが極めて限られていたことは認められなければならないが—が「集団的記憶」として定着し、その後の運動に影響を及ぼしたと評価できるであろうか。

これらの課題が残されているものの、本論文は文献・基礎資料の包括性・体系性および分析において優れたものである。特に黒人を単なる制度の犠牲者あるいは規制の対象としてではなく、アメリカ合衆国の基本的価値体系の継承とそのさらなる発展に主体的に関わった行為者として描いており、わが国におけるアメリカ南北戦争および再建期研究、ひいては再建という歴史的事件の学問的解明に寄与するところ大なるものとして評価される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分に資格を有するものと認める。